

第三帝国における図書館と教養

— 帝国民衆図書館局長官フランツ・シュリーヴァーの図書館論を手がかりに —

基礎教育学コース 松 井 健 人

Bibliotheken und Bildung im Dritten Reich — Eine Analyse der Bibliotheks-idee von Franz Schriewer —

Kento MATSUI

Die Hauptaufgabe dieser Arbeit ist es, die Idee der Bibliotheken von Franz Schriewer im Dritten Reich zu erläutern. Franz Schriewer war die Leiter der Reichsstelle für volkstümliches Büchereiwesen in der NS-Zeit.

Nach Schriewer sollten die deutschen Bibliotheken der Mittler zwischen Bucherzeugung und Volk sein. Er versuchte das "Massenlesen" zum "Volkslesen" zu verändern. Gleichzeitig übte er Kritik am Bildungsgedanken, die das Viellesen der Bücher forderten. Um dieses Ziel zu erreichen, erstellte er die Liste der empfohlenen völkischen Bücher.

Seine Idee war der Bibliothekspolitik der NS-Regierung ähnlich. In seiner Bibliotheks-idee koexistierten die völkische Idee und die Kritik am Bildungsgedanken.

目 次

- 1 はじめに
 - 1A 概要
 - 1B 問題の設定
 - 1C 先行研究
- 2 シュリーヴァーの図書館論
 - 2A 経歴
 - 2B 民衆図書館論
 - 2C 教養批判
- 3 第三帝国における図書館
 - 3A 図書の制限
 - 3B 図書館の増加
- 4 シュリーヴァーの図書館論の思想的意義 — 近代・図書館・教養 —
- 5 おわりに

1 はじめに

1A 概要

本稿の目的は、帝国民衆図書館局（Reichsstelle für volkstümliches Büchereiwesen）長官フランツ・シュリーヴァー（Franz Schriewer）の図書館論を明らかにする

ことを第一義とする。まず、シュリーヴァーの図書館論において教養（Bildung）理念が如何に展開されたのかに着目する。次には、上の目的を達成するための補助線として、帝国民衆図書館局の活動をはじめとした、第三帝国期の図書館の状況を明らかにする。これにより、シュリーヴァーの図書館論の射程を、当時の図書館の状況とかさねあわせることで、歴史的文脈に位置づけることが出来る。以下にまず、このような本稿の問題設定がいかなる意味を持つのかを提示する。

1B 問題の設定

近代社会において読書を成立させる「読書装置」¹⁾であった図書館に対して、どのような教育的意義づけがなされていたのか。本稿ではナチ時代の代表的な図書館員の議論を内在的に分析し、その教育思想を追究することで、この問いへの答えを探りたい。しかし、図書館を思想史研究の対象にするにあたり、実際の図書館がいかなるものであったのか、という歴史的視座をおろそかにすることはできない。さらに、図書館に結びつけられた教養理念をあつかう本稿は、ドイツにおける教養理念の特殊性、とくにドイツ教養市民層という存在をも考慮しなくてはならない。

ドイツにおける教養理念およびそれに依拠した教養市民層は、18世紀末から19世紀初頭にかけてのプロイセンにおける改革による、ギムナジウムと、ギリシア語・ラテン語を重視する新人文主義的な教養理念との結合を発端として形成された。ギムナジウムから大学への進学ルートの確立と、大学卒業者による専門職の形成とが相まって、教養市民層がドイツの社会的エリートを形成することになった²⁾。古典語教育を中心とするギムナジウム教育をうけた教養市民層は、先行研究において、人文主義的な性格の強い「読書人」としても定位されてきた³⁾。

このように近代ドイツにおいては、教育および社会において、読書の持つ意義は大きなものであった。しかし、教養理念の基盤である読書を成立させる「読書装置」としての図書館をめぐる教育思想史的意義は、これまで十分に明らかにされてきたとは言い難い⁴⁾。

本稿は、「図書館」という近代的な読書装置に対する思考の分析をとおして、教養理念と図書館活動との結びつきを歴史的に問い直す試みである⁵⁾。結論をやや先取りすると、本稿の分析を通じて、以下のことが明らかになる。すなわち、シュリーヴァーの図書館論が企図したのは、19世紀以来の教養理念への批判と、個人主義的な読書（大衆読書）を民族主義的な読書（民族読書）へと再編することであった。そして、彼の図書館論は、図書館蔵書を制限し、帝国各地に民衆図書館を設立してゆく第三帝国の図書館政策と多分に親和的であった。

1C 先行研究

ナチ時代の図書館に関する先行研究において、図書館関係者の思想内容に踏み込んで考察するものは決して多くなかった。本稿があつかうナチ時代のドイツの図書館に関しては、従来、歴史学、図書館学の領域において研究がなされてきた⁶⁾。しかし、個々の図書館あるいは図書館員のナチ化・強制的同質化を主題とした研究が大半であり、ナチ時代の図書館論を内在的に分析したものに関しては、包括的な研究がほぼなされていない。

図書館論の内在的分析を試みた数少ない例外として、ナチ時代の図書館組織および人員を包括的に研究したエンゲルブレヒト・ペーゼ、あるいはドイツの公共図書館思想史を論じた河井弘志の研究を指摘することができる⁷⁾。しかし、ペーゼの主要な関心はやはりナチ時代における図書館員・図書館組織のナチ化の過程であり、図書館論の分析はあくまで一側面として限

定的に論じられるにとどまる。河井弘志の著作においても、ナチ時代の図書館関係者の図書館論の分析は、今後の課題として提示されるにとどまっている。本稿では、ナチ時代における図書館関係者として代表的な人物であるフランツ・シュリーヴァーの図書館論を、教養理念に着目しながら分析する。

2 シュリーヴァーの図書館論

2A 経歴

フランツ・シュリーヴァーは1893年にレーゲンスブルクに生まれ、1913年にアビトゥーアを取得したのちにキール大学、ベルリン大学で学び、その後、第一次大戦に従軍した。1921年からはフレンスブルク福祉・教育協会運営図書館の司書となり、1924年にはフレンスブルク市立図書館、ナチ時代の1934年からはフランクフルト・オーデン市立図書館司書を務めた。そして、1935年10月から1937年5月まで帝国民衆図書館局長官を務めた。1939年に国防軍に従軍し、1944年には捕虜となった。戦後も図書館員としてフレンスブルクで勤務を続け、1959年に職を辞したのちに、1966年に没した⁸⁾。アビトゥーアを取得し、大学教育をうけ専門職につく、という経歴はまさしく教養市民層に典型的なものである。

先行研究においては、シュリーヴァーはナチ時代における重要な指導者の一人として位置づけられている⁹⁾。同時に、彼は人格教育をナチ的な教育に置き換えようとしたイデオログとして整理されてきた¹⁰⁾。ただし、ナチ党员ではない点や、国境図書館を中心に活動した点が、シュリーヴァーの図書館論を見る際に考慮すべき点となる。先行研究においてケッテルが指摘するように、国境図書館においてはナチ時代以前から、図書館と国家を強く結びつける考え方が支配的であった。国境地域のフレンスブルク図書館司書から帝国民衆図書館局長官に就任したシュリーヴァーは、第三帝国の民族主義的思考と親和的であり、第三帝国における民衆図書館の組織的発展に際して重要な役割をはたした人物であったと位置づけられる¹¹⁾。本論とのかかわりにおいては、国境図書館での図書館員としての体験が、図書館を通じて民族を形成する、というのちに見るシュリーヴァーの思想に影響した可能性を指摘できる¹²⁾。

彼が長官として就任した帝国民衆図書館局長官は、帝国学術・教育・民衆教育省（Reichsministerium für Wissenschaft, Erziehung und Volksbildung）の下部組織であ

り、1935年に設立された。ナチ時代において都市および農村の民衆図書館の蔵書構成を監視するとともに、図書館専門機関誌『図書館（Die Bücherei）』を発行するなど、第三帝国の図書館行政の中心的な機関であった¹³⁾。

民衆図書館（Volksbibliothek, Volksbücherei）という語にも説明を加えねばならない。民衆図書館は、19世紀後半に、カトリックのボロメウス協会や民衆教育普及協会などの各種の民間教育団体によって設立が進んだ図書館である。とくに非教養層である一般民衆（Volk）に対して、読書・教育の機会を開くことを目的とした¹⁴⁾。一般民衆を主な利用者層として想定する民衆図書館と、教養市民層に主に利用された市立図書館によって、近代ドイツの図書館は二分された状況にあり、「図書館と教養」は19世紀以降、ドイツの図書館における重要なテーマの一つであった¹⁵⁾。このような状況の中で、民衆図書館は、社会的特権であった教養に一般民衆が接近できる場として重要であった¹⁶⁾。

次節以降では、シュリーヴァーの民衆図書館論を明らかにするとともに（2B）、民衆図書館論とあわせて論じられる教養理念を考察する（2C）。

2B 民衆図書館論

本節では、シュリーヴァーの民衆図書館論の内実を明らかにする。

前節でも述べたように、シュリーヴァーは、ナチ時代以前から民族主義的な主張を展開していた。党には在籍しなかったものの、シュリーヴァーの言説は、ナチ・イデオロギーと親和的である。1930年の時点において、「公共の民衆図書館は、ドイツの文化遺産をドイツ人に近づけようとする教育施設である」と述べ、「個人への教育的働きかけは、大いなる民族的生活の連関の認識とそうした連関への目標設定にのみかかっている」と主張している¹⁷⁾。

専門機関誌『図書館』に、「民衆図書館の原理可能性と限界」をシュリーヴァーは1935年に発表する¹⁸⁾。これは民衆図書館の役割について述べた全135条からなる綱要である。全4部構成であり、「遅延と誤解」「真の民衆図書館」「ドイツの図書館における民衆図書館の編成」「教育における編成」の区分がなされる。

まず冒頭から述べられるのは、これまでのドイツ民族の歴史と教育の歴史における誤りである。その誤りとは、自由主義的な思考であり、これを排撃することが図書館においても目指されるべきものだとされる¹⁹⁾。

ナチ時代において、民衆図書館は民族と国家によって主導されるべき存在になった。シュリーヴァーの図書館論は、民衆図書館をドイツ民族の図書館として発展させることを目的とした。では、この民族概念をシュリーヴァーはどのように捉えているのか。

民族性（Volkstum）という概念は、シュリーヴァーによると、「自然性」「精神」「道徳」の三つの統一である、とされる²⁰⁾。シュリーヴァーの理解では、「民衆図書館（Volksbücherei）」における「Volk」とは、多様な社会概念ではない。つまり、「Volk」という概念は、それぞれの社会的立場や階層の総和ではなく、また歴史化された民族性という概念ともかわりがない。ただ、人種と大地（Rasse und Boden）に根づく世界観的な概念であると規定される²¹⁾。以下の文言が、シュリーヴァーの民族理解を端的に示している。

図書館が尺度として目的として要する、民族という概念は、民族の過去と現在からなる活力のある価値そして、政治と経済、自然と精神から形成したものと形成しつつあるものからなる、これらの価値の調和を意味する。我々は、民族性を、凝り固まったものや、歴史的なものとしてではなく、運動であり力であるとみなす²²⁾。

とはいえ、シュリーヴァーにおいて、民衆図書館の機能はあくまでも「書籍生産と民衆との間の、評価され選別された仲介者」である²³⁾。そして、民衆図書館は、民族と国家によって調整されるべき存在となるのであった²⁴⁾。また、民衆図書館は、生活の発展を導くものではなく、その生活のあとを追うものとされた。民衆図書館と民衆図書館員は民族の職務についているのであり、両者は国家に対して責任があるとされる²⁵⁾。

これまで見たような、民族主義的イデオロギーの浸透は、ナチ時代において、図書館活動をも含めた民衆教育（Volksbildung）に特徴的なものであった。ナチ時代では、民衆教育が持っていた個性の伸長、教育への権利、学習への自由といった近代市民社会の個人主義的原理が全面的に否定され、民族主義的イデオロギーに席卷されたとされる²⁶⁾。

では、結局、民衆図書館の役割はどのように定式化されるのか。シュリーヴァーは以下の様に述べる。

民衆図書館の目的とは、国家的図書への指導であり、国家的図書をとおしての指導である。民衆図書館は、精神的な価値と後押しそして、実践的

な生活への援助を提供するのである²⁷⁾。

シュリーヴァーにおいて、民衆図書館はナチ的な民族概念理解のもとに構成されている。そして、図書館は、「国家的図書」を伝達するための仲介者たらしめなければならない。では、彼はそのメディアとしての図書館をどのように規定しているのか。次節では、その図書館の内容を論ずるに当たって、教養批判という視座が、彼の民衆図書館論と密接にかかわっていたことを示す。

2C 教養批判

本節では、前節に見たシュリーヴァーの図書館論を、「教養」との関係性から捉え直すことによって、彼の図書館論が持つ思想史的背景を確認する。

シュリーヴァーは、図書館論を教養論と結びつける。先行研究において、シュリーヴァーは、教養そのものに対して、批判的な態度を有していたことが指摘されている²⁸⁾。シュリーヴァーによる教養批判とは、人文主義的教養理念を、ナチ的教育をととした人間形成に置き換えようとしたものであった。

シュリーヴァーは、民衆図書館評価における判断基準として、「19世紀の個人主義的教養理念」が残存することを批判する。この教養理念の重視は、民衆図書館における教養小説や社会小説の過大評価として現れていると主張する²⁹⁾。シュリーヴァーによれば、

民衆図書館の課題は、社会的地位の高い個人の私的読書 (Ich = Lesen) を支援するものではなく、また、ただの文明的廃棄物である図書からなる大衆読書 (Massen = Lesen) を満足させることにもない。民族読書 (Volkslesen) をつくりだし、促進することが民衆図書館の課題である³⁰⁾。

これらの課題が意味するところは、単なる文学的価値の再編成だけではなく、道徳的＝民族的な新しい思考の在り方であるとされる。

同じ1935年の『図書館』の記事「ドイツ民衆図書館 可能性と限界」においても、19世紀の個人主義的教養主義による教養小説や社会小説の過大評価を非難し、その過大評価が、「自己本位な、ふまじめな (ichstüchtiges und spielerisches) 読書」を生み出したのだと主張する³¹⁾。シュリーヴァーによれば、「大衆読書」とは、自分自身だけのためにおこなう読書であり、民族読書とは、より高次の価値秩序、つまり社会にも

とづいておこなう読書である³²⁾。そのために、民衆図書館から、教養理念と自由主義的思考を取り除くことが責務として主張される³³⁾。

さらに、教養理念の失効を説くシュリーヴァーは、民衆図書館に新たな課題を提示する。それは「過度に文明化された読書を、民族読書に変更すること」であり、その際の図書への評価は「図書における生の内容と生への影響」によって判断されるべきものであるとされた³⁴⁾。

シュリーヴァーは著書『ドイツの民衆図書館』の冒頭で、図書館界における「読書と教養 (Lesen und Bildung)」という決まり文句を、「読書と生 (Lesen und Leben)」に置き換えることを主張する。すなわち、図書が一人ひとりの人間形成に資するという楽観主義は捨てなければならないとされる。シュリーヴァーによれば、図書によって内的人格 (innere Gestalt) が向上するなどということは現実的ではなく、図書をとおして陶冶された (gebildete) 人間が生まれるようなこともない³⁵⁾。つまり、読書を通じた人格の陶冶、という教養の理念は明確に否定されている。それどころか、多読を押しとどめ抑制すること、これが図書館の課題の一つとして提示される。というのも、多読することは、読書における民族的課題にほとんど意味をなさず、むしろ生からの図書への逃避としてとらえられるからである³⁶⁾。

以上、シュリーヴァーの教養に対する思考から、大衆読書から民族読書へ、そして、「読書と教養」から「読書と生」へ、という二つの思考の展開を確認することができた。これは前節で確認した、図書館という仲介者の具体的課題を規定するものとして捉えることが出来る。では、実際の図書館においてはどのような読書が目指されようとしたのか。

この問いに十全にこたえることは本稿ではかなわないが、これまで論じたシュリーヴァーの図書館論が、ナチ時代の図書館の実際の状況と照らし合わせて、どのような位相にあったのかを確認する必要があるだろう。

3 第三帝国における図書館

本章では、ナチ時代における図書館活動を、図書館蔵書の制限と図書館の設立という二点に着目して明らかにする。これをとおして、シュリーヴァーの図書論と教養論が、当時の図書館の状況においてどのような整合性を持ったのかを検討する。

3A 図書の制限

図書の制限に当たっては、ゲッベルスを長とする帝国文化院の下部組織である帝国著作院が大きな役割を果たした。同時に、検閲機関としては、帝国著作院以外にも、フィリップ・ブーラーを長とした「ナチ的著作物を保護するための党検閲委員会」およびアルフレート・ローゼンベルクによる「帝国ドイツ著作物推進機関」などが並立していた³⁷⁾。

このような制度面での各機関の並立がありながらも、1933年5月16日には、官報上に、肅清によって公立図書館から排除されるべき図書のブラックリストが公表された³⁸⁾。このリストには131名の著者と4つのアンソロジーが含まれていた。また、ブラックリストの作成に当たっては、同年5月10日に全国各地で行われた焚書に加担したベルリンの図書館司書ヴォルフガング・ヘルマンなど、図書館関係者も関与した³⁹⁾。

1935年には、「不適切及び有害図書リストI (*Liste I des schädlichen und unerwünschten Schrifttums*)」が帝国著作院によって作成された。ユダヤ人による著作やマルクス主義・共産主義関連文献をはじめとした、ナチ体制にとって好ましくないと考えられた3000以上の著作が記された。このリストは業務用に限定され一般には公開されなかったが、1939年からは1944年まで毎月更新されていった。つまり、このリストによって、禁止図書に関する統一的な基準が形成されることになった⁴⁰⁾。

また、図書の制限に加えて、ナチ的図書の推進・プロパガンダをも指摘しなければならない。のちに見るように、図書館蔵書においては、ナチ的図書が積極的に受け入れられ、ナチ時代の新設民衆図書館の基本的

蔵書をなした。

シュリーヴァーは、公立図書館および小都市図書館のため国民社会主義的文献の推薦図書リスト『ドイツの覚醒』(1933)の選定を主導している⁴¹⁾。この『ドイツの覚醒』では、全61冊の推薦図書がコメント付きで紹介され、ヒトラー、教育学者エルンスト・クリーク、作家ハンス・グリムらの国民社会主義的な内容を含んだ図書が推薦されている。

では、以上のような図書館蔵書の制限と国民社会主義的な図書の推薦が、図書館活動の展開においてどのような影響を与えたのか。次節では、この影響を図書館の新設という観点から確認したい。

3B 図書館の増加

ナチ時代における図書館の増加について、ドイツ図書館史研究者のタウアーとフォドゼクによれば、図書館の数は、1933年4月の6213館から1940年4月の11823館まで増加した。つまり、約5600館⁴²⁾もの新たな図書館が設置されたことになる⁴³⁾。

しかし、この新たな図書館が、基本的には小規模の村に設置された民衆図書館であったという点に留意しなくてはならない。またナチ・イデオロギーが反映されたほとんど同一の蔵書構成を持っていたという点も特徴的である⁴⁴⁾。下の図1は、シュリーヴァーが民衆図書館を論じる際に例示する、ナチ時代のある村立民衆図書館の蔵書全てである⁴⁵⁾。シュティエグによれば、このような貧弱な蔵書からなる新設民衆図書館が、増加した約5600館の大部分を占めていたという。例えば、1937年における新設の図書館の平均蔵書数は192冊であった⁴⁶⁾。

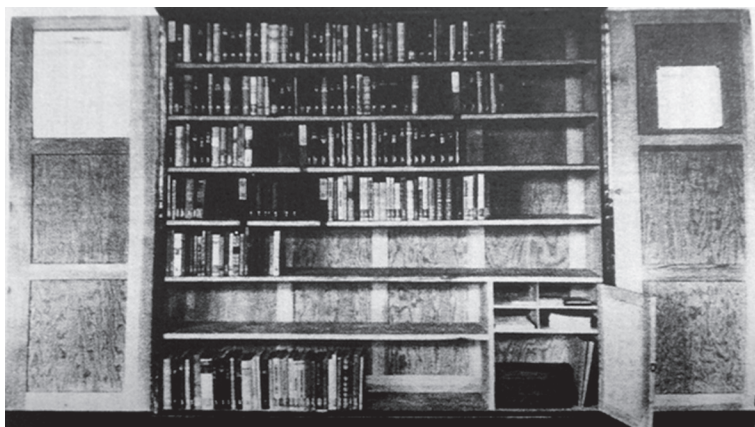


図1 ⁴⁷⁾

このように、民衆図書館数は増加したものの、その蔵書の内容は画一的であり、かつ貧弱であった。これを見ると、ナチ時代における図書館政策は空疎なものであったかのように見えるかもしれない。しかし、蔵書が貧弱であっても、いやむしろ貧弱であるからこそ、読書の内容を著しく規定したナチ時代特有の図書に対する関わり方との整合性がとれたともいえる。

4 シュリーヴァーの図書館論の思想史的意義 ―近代・図書館・教養―

これまで本稿で論じたことをまとめれば、シュリーヴァーの図書館論とは、図書館を「国家的図書」の仲介者として定義づけ、大衆読書から民族読書への変容を指導する教育施設として構想してゆくものであったといえる。そして、この構想は、実際のナチ時代の図書館の状況と親和的なものであった。

では、これらは思想史的にはどのような意義を持ちえるのか。端的にいえば、シュリーヴァーの図書館論は、図書館の近代性の解体と教養理念の没落との接合であったといえるだろう。

近代図書館は、近代的主体の成立・維持・強化に寄与する社会的機能を有していた⁴⁸⁾。海野らの指摘によれば、近代図書館の理念として、「利用者の自発性」、「コレクションの完成性」、「サービスの普遍性」が挙げられる⁴⁹⁾。シュリーヴァーの図書館論は、とくに図書館による「国家的図書」への読書指導を掲げた点で「利用者の自発性」を、図書の制限を訴えた点で「コレクションの完成性」の二点を解体するものであったといえる。

また、シュリーヴァーの図書館論は、教養市民層による教養批判として特色がある。「多読」が批判され、民族読書への変容が主張された。そして、その図書館論は、無条件に両者を接合することはできないにせよ、第三帝国における図書館の実態と親和的である。つまり、第三帝国においては、図書館の蔵書が検閲・没収されるとともに、国民社会主義的な内容の図書が推薦され、小規模蔵書の民族図書館の増設が進んだ。

それらはひいては、近代的な主体と結びついた図書館という組織を解体する試みであり、ここにナチスの反近代性を読み取ることができるだろう。しかし、読書装置たる図書館を全土にあまねく普及させていくことそれ自身は、極めて近代的な事象である。図書館をめぐる近代性と反近代性が、ナチスにおいては同居している。

5 おわりに

本稿では、帝国民衆図書館局長官フランツ・シュリーヴァーの図書館論およびその図書館論に内包される教養論を明らかにした。あわせて、ナチ時代の図書館活動の実態を明らかにすることで、シュリーヴァーの図書館論の射程を明確にすることを試みた。

結果、シュリーヴァーの図書館論は、教養批判であると同時に、そこから読書行為を再編する構想を有するものであったことが判明した。また、ナチ時代の図書館活動の実態として、禁書リストおよび推薦図書リストの発刊による図書の統制を進めると同時に、帝国各地に民衆図書館を設立していったことが判明した。この実際を見ることで、シュリーヴァーの図書館論の射程、つまり彼の「大衆読書から民族読書へ」という命題がどのような実践を指定するものであったのかが明らかになったといえる。それはすなわち、多読の抑制と、国民社会主義的な図書に限定された読書の推奨である。とはいえ、シュリーヴァーが帝国民衆図書館局長官であったからといって、帝国民衆図書館局の活動とシュリーヴァーの図書館論をそのまま重ねあわせることはできないだろう。

また、シュリーヴァーの図書館論が現実にどれほどの影響を及ぼしたのか、さらにシュリーヴァーの提唱した民族読書は具体的に如何に展開されるべきものであり、実際どのような読書として図書館で展開されたのか。これらは今後の課題である⁵⁰⁾。

ドイツ近代において、「教養 (Bildung)」は、これまでその理念的な多義性あるいはその空虚さを指摘されてきたが、しかしある種の社会階層 (教養市民層) と結びつき、現実社会において影響力を保持した理念である。本稿は、その「教養」を基礎づけた読書という行為を拡大あるいは再生産する図書館という機構に着目して、その思想史的意義を問う試みであった。本稿が示すことが出来たのは、ナチ時代のある教養市民による教養批判、そして多読への忌避とそれと同期する「国家的図書」を備えた小規模民衆図書館の増加である。

本稿が問おうとした問題圏に対して、示しえた上述の事柄はその一端にすぎないが、今後も図書館・読書・教養をめぐるなされた言説の歴史的・思想史的意義を追及することを課題としたい。

付記

本稿の執筆にあたり、河井弘志氏 (立教大学名誉教授)、吉田右子氏 (筑波大学教授) の両氏に多くのご

協力いただいた。とくに河井弘志氏より、ドイツ図書館思想史に関する文献のご教示いただいた。両氏なくしては、本稿は成立しなかった。ここに記して厚くお礼申し上げたい。

また本研究は、東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センターZDS-MAプログラムの奨学助成を受けたものである。

注

- 1) 永嶺重敏『“読書国民”の誕生—明治30年代の活字メディアと読書文化』日本エディタースクール出版部、2004年、169頁。
- 2) 野田宣雄『ドイツ教養市民層の歴史』講談社、1997年、28-29頁。
- 3) フリッツ・K・リンガー著、西村稔訳『読書人の没落』名古屋大学出版会、1991年。
- 4) 教養と図書館という問題圏を扱った研究として、長尾宗典「一九二〇～三〇年代における「文化主義」と図書館」『史境』(63)、2011年、19-35頁などが挙げられる。
- 5) 扱う対象は本稿とことなるが、ドイツ市民社会における教養理念の歴史的展開に着目する先行研究として、宮本直美『教養の歴史社会学—ドイツ市民社会と音楽』岩波書店、2006年が挙げられる。
- 6) 代表的なものとして、Friedrich Andrae, *Volksbücherei und Nationalsozialismus Materialien zur Theorie und Politik des öffentlichen Büchereiwesens in Deutschland 1933–1945*, Wiesbaden, O. Harrassowitz, 1970; Margaret F. Stieg, *Public Libraries in Nazi Germany*, Tuscaloosa, University of Alabama Press, 1992; Jutta Sywottek, *Die Gleichschaltung der deutschen Volksbüchereien 1933 bis 1937*, Archiv für Geschichte des Buchwesens, (24), 1983, S. 385-536; Stefan Alker, Murray G. Hall und Markus Stumpf(Hrsg.), *Bibliotheken in der NS-Zeit. Provenienzforschung und Bibliotheksgeschichte*, Göttingen, Vienna University Press bei V&R unipress, 2008. などが挙げられる。
- 7) Engelbrecht Boese, *Das Öffentliche Bibliothekswesen im Dritten Reich*, Bad Honnef, Bock u. Herchen, 1987; 河井弘志『ドイツの公共図書館思想史』京都大学図書館情報学研究会、2008年。
- 8) シュリーヴァーの経歴については、以下を参照。Volker Weimar, *Franz Schriewer 1893–1966*, Berlin, Deutscher Bibliotheksverband Arbeitsstelle für das Bibliothekswesen, 1976, S. 7; Margaret F. Stieg, a.a.O., pp. 41-43.
- 9) Margaret F. Stieg, a.a.O., pp. 41-42.
- 10) Engelbrecht Boese, a.a.O., S. 87.
- 11) Andreas Kettel, *Volksbibliothekare und Nationalsozialismus: Zum Verhalten führender Berufsvertreter während der nationalsozialistischen Machtübernahme*, Köln, Pahl-Rugenstein Verlag, 1981, S. 47-50.
- 12) 本論では、紙幅の都合上、シュリーヴァーの国境図書館についての思考まで論じることにはできない。第三帝国の国境図書館について以下を参照。Margaret F. Stieg, a.a.O., pp. 216-240.
- 13) Vgl. Jan-Pieter Barbian, *Literaturpolitik im NS-Staat. Von der »Gleichschaltung« bis zum Ruin*, Frankfurt am Main, Fischer

- Taschenbuch Verlag, 2010, S. 348-349; Christine Koch, *Das Bibliothekswesen im Nationalsozialismus: Eine Forschungsstandanalyse*, Marburg, Tectum-Verlag, 2003, S. 65.
- 14) 河井、前掲書、16-17頁。
 - 15) 同上、117-137頁。
 - 16) Dieter Langewiesche, *Volksbildung und Leserlenkung in Deutschland von der wilhelminischen Ära bis zur nationalsozialistischen Diktatur*, IASL online, 2000.
 - 17) Franz Schriewer, *Buch Volk und Menschheit*, in: Franz Schriewer(Hrsg.), *Kultur, Buch und Grenze*, Leipzig, Quelle & Meyer, 1930, S. 7.
 - 18) Franz Schriewer, *Die Volksbücherei. Möglichkeiten und Grenzen, Die Bücherei*, (2), 1935, S. 193-202.
 - 19) Ebenda, S. 194.
 - 20) Franz Schriewer, *Die deutsche Volksbücherei, Die Bücherei*, (2), 1935, S. 300.
 - 21) Franz Schriewer, *Die Volksbücherei. Möglichkeiten und Grenzen, Die Bücherei*, (2), 1935, S. 195-196.
 - 22) Franz Schriewer, *Was heißt Volkstum in der Bücherei?*, *Die Bücherei*, (1), 1934, S. 441.
 - 23) Franz Schriewer, *Die Volksbücherei. Möglichkeiten und Grenzen*, S. 197.
 - 24) Ebenda, S. 200.
 - 25) Ebenda.
 - 26) 新海英行『現代ドイツ民衆教育史研究—ヴァイマル期民衆大学の成立と展開—』日本図書センター、2004年、215-217頁。
 - 27) Franz Schriewer, *Warum staatliche Stellen für das Volksbüchereiwesen, Die Bücherei*, (3), 1936, S. 6-7.
 - 28) Engelbrecht Boese, a.a.O., S. 87.
 - 29) Franz Schriewer, *Die deutsche Volksbücherei*, S. 299.
 - 30) Ebenda.
 - 31) Franz Schriewer, *Die Volksbücherei. Möglichkeiten und Grenzen*, S. 195.
 - 32) Ebenda.
 - 33) Franz Schriewer, *Die deutsche Volksbücherei*, S. 300.
 - 34) Franz Schriewer, *Das ländliche Volksbüchereien. Einführung in Grundfragen und Praxis der Dorf- und Kleinstadtbüchereien*, Jena, Eugen Diederichs Verlag, 1938, S. 64.
 - 35) Franz Schriewer, *Die deutsche Volksbücherei*, Jena, Eugen Diederichs Verlag, 1939, S. 13.
 - 36) Ebenda, S. 17.
 - 37) ヤン・ベルクほか著、山本尤ほか訳『ドイツ文学の社会史：1918年から現代まで』法政大学出版局、1989年、621頁。
 - 38) ディーター・プロイアー著、浜本隆志・宇佐美幸彦・芳原政弘訳『ドイツの文芸検閲史』関西大学出版部、1997年、343頁。
 - 39) Vgl. Dietrich Aigner, *Die Indizierung »schädlichen und unerwünschten Schrifttums« im Dritten Reich*, Nordrhein-Westfalen, Buchhändler-Vereinigung, 1971, S. 1019-1020.
 - 40) Uwe Jochum, *Kleine Bibliotheksgeschichte. 2., durchgesehene und bibliographisch ergänzte Auflage*, Stuttgart, Reclam, 1992, S. 170.
 - 41) Franz Schriewer(Hrsg.), *Der deutsche Aufbruch. Eine Liste neuerer nationaler und nationalsozialistischer Literatur für Dorf- und Kleinstadtbüchereien*, Berlin, Vereins Grenzbüchereidienst und Bildungspflege, 1933.

- 42) より詳細には、1933年に263館、34年に465館、35年に608館、36年に671館、37/38年に2931館が新設されたとされる (Vgl. Heinz Dähnhardt, *Deutsche Büchereiarbeit von heute, Die Bücherei*, (5), 1938, S. 649-650.)。ただ、その数字の信頼性については疑義が残る (Vgl. Dieter Langewiesche, a.a.O.)。とはいえ、少なくとも、ナチ時代に民衆図書館の積極的な新設が推進されたことには間違いない。
- 43) Wolfgang Thauer/ Peter Vodosek, *Geschichte der Öffentlichen Bücherei in Deutschland. 2., erweiterte Auflage*, Wiesbaden, O. Harrassowitz, 1990, S. 153. (=ヴォルフガング・タウアー、ペーター・フォドゼク、河井弘志訳『ドイツの公共図書館運動 興隆・挫折・再起の歴史』日本図書館協会、1992年、161頁。)
- 44) Ebenda.
- 45) シュテューグは、このシュリーヴァーの例示する民衆図書館を、蔵書統計などから判断し、当時の民衆図書館の一般的なモデルとして位置づけている。Vgl. Margaret F. Stieg, a.a.O., p. 132.
- 46) Ebenda, p. 131.
- 47) Franz Schriewer, *Das ländliche Volksbüchereien. Einführung in Grundfragen und Praxis der Dorf- und Kleinstadtbüchereien*, S. 65.
- 48) 海野敏、影浦峯、戸田慎一「近代の主体の成立と図書・図書館による近代の存立」『日本図書館情報学会誌』, 52(4), 2006年, 218頁。
- 49) 同上, 216頁。
- 50) 具体的に図書館で読書はどのように展開されたのか。これはすでに述べたように、今後の課題であるが、ひとまず、第三帝国時代の図書館活動に言及した先行研究として、デートレフ・ポイカート著、木村靖二・山本秀行訳『ナチス・ドイツ ある近代の社会史』三元社、1992年、28-29頁を指摘することができる。そこで、「読書の健全化」として、図書館利用者・貸出冊数減少を、図書館側が賛美する言説を確認できるだろう。

(指導教員 小玉重夫教授)